
地の果てまで逃げる男ガガ

雨露しのぐ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地の果てまで逃げる男ガガ

【Nコード】

N4102J

【作者名】

雨露しのぐ

【あらすじ】

地の果ては遠く、世界はいまだ獣たちの物である。

人は常に獣の気配に怯え、人の住む城砦都市の壁は日に日に硬く大きくなっていく。

もし歴史書を振り返ったならば、それは人との争いの記述に埋め尽くされる事であろう。

——しかしそれでも人は戦ってきた。何世代にも渡り、多くの犠牲を払いながら。

獣はそんな人間をあざ笑うかのように人間世界を壊して回っていく。

【強者と弱者】その関係性が変わる事は永遠にないというかのうに。

人は常に狩られる側。

物語はそんな世界における逃亡者たちの姿を映す。

彼らは誰なのか。

何から逃げているのか。

そしてそんな彼らの行き着く先とは一体——。

以下作者コメント：

ガガ序盤は世界観の紹介兼ねてやってます。

のち本編になると逃げた先々での敵を主役とした物語など

逃亡劇とは直接関係のないお話をちよくちよくはさむつもりです。

プロローグ：狩り

地の果ては遠く、世界はまだ獣たちの物である。

人は常に獣の気配に怯え、人の住む城砦都市の壁は日に日に硬く大きくなっていく。

もし歴史書を振り返ったならば、それは人との争いの記述に埋め尽くされる事であろう。

しかしそれでも人は戦ってきた。何世代にも渡り、多くの犠牲を払いながら。

獣はそんな人間をあざ笑うかのように人間世界を壊して回っている。

【強者と弱者】その関係性が変わる事は永遠にないと言うかのよう。

人は常に狩られる側。

——そんな世界のある時ある場所にて。

弱者たる人間による人間相手の狩りが今まさに行われようとしていた。

肩まで届くかという草が茂る草原。

ザザザ…ザザザ…。

ザザザザザ…。

そこをまるで炎のように赤く、しかし遊びの一切ない装甲を身に着けた大群が、草の他何もみえない真っ暗闇の中を軽やかな足取りで駆け抜けていく。

「逃がすものか…」

その大群の長らしき一人だけソレと分かる立派な装飾の、赤を中心とした装甲を着ている。人間が小声で呟く。

いや、人間というにはあまりに巨大で、なによりも腕がおかしい。

鉄の塊、それも先端に当たる部分がいかにも暴力的な形、巨大なハンマーの様な形をしている。

それどころかこの男。

顔の右半分が、いや3分の2以上が獣、荒々しい顔つきの犬なのである。

ライオンを思わせるようなたて髪を生やし見るものを威圧してやまない眼光。

そんなどうも鼻屑目に見てもいかつい、顔半分以上が犬の男の顔に

> 普段は豪快に笑うのであろうと容易に想像出来る顔であるくまるで似合わない焦燥の色が浮かんでいる。

「急げ！ まもなく夜が明ける！ それまでになんとしても奴を捕らえるのだ！」

男が低くも大きな声で叫ぶと、> 無言だがくそれに応える様に全体の、赤い男たちの速度が上がる。

「朝が来てしまったら終わりだ……。逃げられてしまう。奴の力なら……。それだけは避けなくては」

何かに怯える様な声を、誰にも聞こえないような小さな声で呟く。

それからいくらか黙々と進んだ所で、先に行く部下と思われる男から常人には聞こえない独特の音く犬笛のようなものだろうか>による報告が響く。

”対象発見”

大男はその報告を受け、その報告された方向に目を向けてみる。

対象がいるであろうそこには闇が広がるばかりだ。

——だが男の目はもう何かを捕らえているようであり、先ほどの焦りなどまるで感じられない獰猛な光をたたえている。

ザザザ…

ザッザッザッザッ…

二人分の足音が響く。

その片方は明確な目的があるのか確かな足取りと足音。

しかしもう一方はというと、疲労と恐怖によるものだろうか。

リズムが乱れている。

「ねえ！」

若い女の甲高い声上がる。

「ねえ！どうするの！」

場所が場所ならもてはやされるであろう美しい顔を泥と汗で汚しつくした女が、泣きそうな目をしながら前を走る男<こちらはぼさぼさな黒髪の妙に色白で、全身を土色の地味なマントで包んだどこか陰気な男>に向けて叫んでいる。

そんな女の叫びが聞こえているのかいないのか、男は別の何かを聞くのに集中しながら真つ暗な草原の前だけを見てただひたすら走り続けている。

「脱出出来たのまでいい…！けれどこのままじゃいずれ…！」

走りっぱなしな上に前もよく見えない、広く暗い草原だ。

女が不安になるのも当然だ。

しかし前を走る男は関係ないとばかりに反応を見せない。

これではまるで独り言である。

「そもそも……今どこを走ってるのかわかっているの？」

そこで女はあえて一番聞きたかった質問。

しかし聞いて悪い反応が返ってきたらと思うと怖くて聞けなかった質問をぶつけてみる。

反応がどうせないだろうと思ってたからこそだ。

すると。

ついに今さっきまで何の反応も見せなかった前を走る男の足が唐突に”ピタリ”と止まった。

思わぬ反応だ。

おかげで突然の予想外な反応に体がついていかず、頭を男の硬い
く装甲を着ているのだろう。背中になくぶつけてしまう。

「……」

女は無言と共に少しだけ非難めいた目を男の背中に向けた。

だが、今はそれどころじゃないと非難の言葉はとりあえず置いておき、男が止まったのは話を聞く合図だとの思いから、再び疑問の口を開こうと――

したのだが、そうしようとした矢先。

男は”ガバツ”という音をたて、まるで犬が匂いを嗅ぐかの様にうずくまってしまった。

止まるのと同様にあまりに唐突で、しかし異様な光景。

女は口を開いたまま何も言えなくなる。

それはまるで犬が道端の匂いを嗅いでいる時のようだ。

そしてそのイメージそのままに男は鼻を小さく鳴らし、実際に匂いを嗅ぎはじめる。

スンスン……

スンスン……

スンスン……

3度ほど位置を微妙に変え匂いを嗅ぐといった動作を繰り返した後、何事もなかったかのように立ち上がり、ついに女の方は一度も見ずに、体の角度を少しだけ右に変え、

「行くぞ」

一言だけ言葉を発し、再び走りだしてしまふ。

獣人とはこういうものなのだろうか……女は思う。

そうして、この男にはもはや何を言っても無駄と悟ったのか諦めたのか、顔を左右に振った後同じく体の角度をいくらか右に変え走り始めた。

プロローグ：狩りゝ其の二へ続く

ブログ：狩り（後書き）

長いんで分割しただけです。

1 / 15

又オ↓マグヌスへ変更

1 / 17

本文微修正

1 / 29

文章微調整

1 / 1 / 1 / 13

本文微修正

1 / 1 / 1 / 14

本文の矛盾修正

文章修正

1 / 1 / 3 / 6

文章微修正

1 / 1 / 1 / 1 / 18

改行

句読点変更

プロローグ：狩りゝ其の二

——どれくらい走っただろうか。

男はまるで疲れる気配を見せないが、女にはなかなか辛い距離であつた様だ。

限界を迎えようとしている。

するとどうしたことが。

リズムよく前を走る男の足が再び”ピタリ”と止まった。

同じく女もだ。

ちなみに前回の事もあり気をつけていたので今回はちゃんと止まる事が出来た。

それからしばらく肩で息をしながら女は『今度は何事か』と膝に手を置き待っていたのだが男には動きがまるでない。

ただジーっと前を見るだけだ。

数瞬そんな男の背中を眺めた後「なにをしているの？」と、疑問のままに男の右腕の横あたりから前を覗いてみる。

すると男の前には背の高い草はなく、円形に<大きな館がひとつすっぽり入るだろうか>平地が広がっていた。

「さっきあなたは何かを探していたようだけど……それはここなの？　いつたいなにが……」

平地には誰かがいる気配もなく男が止める素振も見せなかったの
で、女は危険はないと判断したのか平地の中央に向かってゆっくり
と歩き出していく。

そして中心部付近に近づいた途端――”ビクリ”と体を強張らせる。

「!？　……こ、これって………転送陣！　何でここにこんな物が……」

女が慌てた調子で目を見開きながら呟く。

平野の中心部に何やら白い円が描かれている。

「こんな物が国の管理の届いていない場所にあるなんて」

顔は驚きにますます硬直する。

どうやらこの白い円は<正確にはところどころ紋様が描かれていてキレイな円形とは言い難い>この場にあるような物ではないようである。

「発光してる……という事はこれは最近作られた物。あなたはこれを探していた……」

さきほど男に向かって投げかけた質問の答えを言いかけた女の言葉は、再び男の行動によって最後までしゃべることなく途中で終わる事になる。

なぜなら。

そう、なぜなら。

先ほどまで口元を真一文字に結び押し黙っていた暗い男が。

いつの間にかこちらを向いて、笑っているからだ。

しかもそれは……とても歪んだ笑い。

——この男、歳は女と同じくらいか少し下と言った所か。

一見すると男らしく目を引く姿をした男だが全体に漂う獣の様な、それも暗闇を好んで背負った様な危険な獣の雰囲気のせいか、どうも美男子としては扱いかねる男——。

そんな男のそんな笑顔を見た瞬間、女は叫ぶこともなく、しかし真剣な顔でその場をはじかれるように飛びのいた。

女は”その行動”の意味を瞬時に理解した。

いや、させられたのだ。

この人の形をした獣が笑った時の意味を。

刹那、男の右手に気づかぬ内に握られていた拳より少し大きめの黒い鉄球が、先ほど女がいた場所をものすごい速度で通り過ぎていく。

「ガギ……！」

鉄球が向かう先く草むらから一歩だけ足を踏み出した所>にいた何者かが、その鉄球を鈍い音とともに見事顔面でキャッチし、鈍い音を立てながら顔を中心にしてグルリとひっくり返った。

そして鉄球は落ちる…かと思いきや投げた男の手元へと、跳ね上がりを利用しつつ返って行った。

どうやら細いチェーンのような物でつながっているようだ。

「見つけたぞ」

ひっくり返った男の先から野太い声が響く。

と同時に平野の半円部分の草むらから赤い男たちが”ザザザツ”と小さな音を立てつつ半身を出す。

「まさかこんな所に転移陣があるとは…」

女と同じ疑問を口にしながらその男、顔の半分がブルドックの様な男が出てくる。

「どうやら後一步で逃げられる所だったみたいだな…あぶなかった。しかし何にせよ追いついた」

また一歩歩む。

その手のハンマーを振り上げつつ。

「ガガ」

「もう逃がさんぞ。ガガ」

男はつぶやくと共にハンマーを大地に向かって振り下ろし、その叩く部位が着地点へと到達した瞬間――

雷鳴。そう表現した方が適してると言わんばかりの轟音を鳴らしつつ大地を文字通り『破壊』した。

ハンマーの着地点を発信源とした『破壊』は平野の中心部、ガガと言われた男の方向に、まるでその破壊衝動が意思を持つてるかのように大地を隆起させながら突き進む。

ガガは小さな息を「はっ！」と吐くと同時に自分の後方に逃げていた女を腰に抱き数メートル左へと驚異的なジャンプ力で飛びのいた。

「な!？」

腰に抱えられた女は今日何度目かわからない疑問を思い浮かべつつ体を硬くさせていた。

ガガは地面に着地すると同時にく腰を低く屈めつつ、円陣の方へと目をやった。

するとそこにはもはや円陣と呼べるものはなく、ただ壊された地面があるだけだ。

「それがなければこの場から貴様らが逃げる手段はあるまい」

低く笑いながら男はガガをにらめつける。

しかしにらめ付けられた男——ガガはただ歪んだ笑みを見せるだけである。

「相変わらずだな、俺が誰だかわからぬ貴様じゃない」

しかしそこでいち早く反応したのはガガではなく、大地に下ろされて身構えている女である。

「公爵！ マグヌス公爵！ それにあの姿、獣人！ なんてこと……なんて事なの……」

一転絶望色に顔を染めて女が言う。

——この世界には明確な階級が存在している。

王族、そしてそれにつらなる貴族、商人、農民等々。それぞれ能力出身によりクラス分けをされているのだ。細かく言えばたとえば商人の中でもランク分けがいくつもされている。

しかしこの世界で独特なのは、貴族階級に農民でも誰でも腕力、あるいは特殊能力<必ず暴力に結びつく能力を持ち合わせている>次第でいくらでも駆け上げられると言うことである。

元々はそうじゃなかったのかもしれない。しかし何世代もこの獣が上位に来る世界を耐え抜いてきた人間たちは――文明を栄えさせながらもいつのまにか獣側に近づいていった。精神的だけではなく肉体的にもである。

強さの次元の違う獣に対抗する為には<獣の中には小山より大きなモノもいると聞く。>自身も獣になる他ないと考えられたからだ。そして科学技術や秘術（こちらは噂の域を出ない）により獣の力を得、そして姿をも変えた人間がまだ少数ではあるが着実に増えていつている。

ともかく必然的にこの世では、位が上の<貴族の>人間は強いのである。問答無用に。相手にする人間にとっては悪夢の様に。

そしてそんな人間、それも上位に位置する人間に敵として相対してしまった人間は、ただ震える事だけが許されているのである。

戦場にて、会ってはいけない。

会ってしまったらもう先はない。そういった存在。

今日の前にいるマグヌス公爵はその中でもまさに上位に属する人間なのである。

——場面は緊迫した場に戻る。

「どうして」

体をガクガクと震えさせ、齒をガチガチ鳴らしつつ女が言う。

明らかに爵位を知る前と震え方が違う。気絶一步手前といった感じが。

しかしそんな女の気持ちを知ってか知らずか前に腰をかがめて立っている緑の獣ガガはただ笑みを深めるだけ。

そんな中突如として動き出したのは周囲を固めていた赤い者たち。

順番でもあるのか一人づつくと言っても先に殴るか後に殴るかだけの差である。飛び掛ってきた。それぞれ腕はマグヌス公爵とは違う剣状に変形していく。

ガガはその動きの先頭にいる相手に向かって鉄球をまず投げつけた。

「グッ」と言ううめき声が聞こえるより先に女を軽くにらめつけた後目にも留まらぬスピードで相手の脇をすり抜け——今度は鉄球のチェーンを短く持ち次々に当てていく。

「ハハッ！」

相手を倒すのがそんなに楽しいのか。

やはり笑いながらである。

そんな様を見ていた女はその鈍い音を聞いていく内になんとか正気を取り戻したのか徐々に後ろの方く隆起して隠れるにはちょうどいい即席の岩場>に逃げ込んだ。

決着は早く。

出てきた男たち一団は大地に伏している。

それを見たマグヌス公爵は驚くでもなく、軽く一回頷くだけだ。

この場で驚くと言うリアクションを見せたのは岩場に隠れている女のみである。

「い、今何をしたの…これがあの男の力なの？」

自然と流れ落ちる汗をぬぐいつつ今日の前で起こった事にひたすら驚いている。

「変体もしていないのに…これは…」

沈黙が流れる。これから行われる戦闘を予期しての、いわゆる嵐の前の静けさなのだろうか。

暗闇の中。

人の形をした獣たちの”乱暴すぎる踊り”は続く――。

ブ
ロ
ー
グ
:
獣
二
人
へ
続
く

ブログ：狩り、其の二（後書き）

長いんで分割しただけです。

1 / 15

又オ↓マグヌスへ変更

1 / 17

本文微修正

1 / 29

文章微調整

1 / 1 / 1 / 13

本文微修正

1 / 1 / 1 / 14

本文修正

1 / 1 / 3 / 4

本文微修正

1 / 1 / 3 / 6

本文微修正

1 / 1 / 1 / 1 / 18

改行および、ごく一部文章修正

キーとなるような設定に関してはあえて改行少なめ

プロローグ：獣、二人

「……んん」

まぶたをゆっくりと開く。

窓から差し込む陽光がまぶしい。

ただどうも視界がハッキリしていない。

「あれ……私……」

疑問が頭にのぼる。

が、頭が覚醒せず、ボーっとしてしまう。

そうしてももの数秒そうして固まったのち――

”ハッ”として上体を起こす。

「いつっ」

体の節々が痛む。

そのためこれ以上起き上がる事ができない。

仕方なしにとりあえずは首を巡らし周りを見える。

その結果わかったことは、どうやらここは民家の中で、女はベッドの上で眠っていたらしいという事だけだ。

「何……私……ここに？」

要領を得ない単語を発している。

その内に目が覚めてきたのか、顔に緊張が走る。

「確か公爵と出会って……あ！ ガガは」

慌てて首を再び巡らすが当然同じ部屋にはいないようである。

「どこに……」

街。

大きすぎる湖の一端にある港町である。

ガガはその船着場付近にいた。

少女く14〜15歳といった所か、に連れられて何やら荷物を運んでいるようだ。

「……もう買物……いいのか」

妙にゆっくりとした小声でガガは尋ねると、少女は「ええ」とこちらは対照的にハッキリとした声で肯定の意を示す。

栗色の髪をした意志の強そうな目をした少女である。

「あとはそれをおじいさんに届けたら家に帰りましょう。

もしかしたら彼女、目覚めてるかもしれないですし」

彼女とはガガと一緒に逃げてた女である。

「そういえば……彼女の名前まだ聞いてなかったけど……」

当然の疑問を口にする少女。

だが返ってくる返事はそっけない。

「目覚めてから本人に聞くといい」

メンドくさいからなのかホントにそれが良いと思っているのかその半目がちな目からはわからない。

「それもそうですね」

そんなガガの対応にも不快に思っていないのか極めて明るい声で返事をする。

と、その時。

何か良いものでも見つけたのか嬉しそうな顔で少女が声を出した。

「あ！ おじいさん」

少女の声がより明るいものへと変わる。

「おおジュナ」

声の先からは白髪交じりの頭をしたいかにも頑固親父といった風情のくしかしガツシリとした体軀をしている男が、若い頃には持ち合わせていなかったであろう顔をくしゃくしゃにした笑顔でジュナを迎えた。

「持つて着ました……」

ガガはジュナの後ろから老人と言うにはまだ若い男に声をかけた。

「おう！ ごくろう！ 荷はそっちの船の近くに降ろしといてくれ！」

腹から出てるであろう大きな声で指示を出す。

「しかしお前。体細いのにな力あるな！ 顔からじゃ想像できねえ」

荷物を指示通り運ぶガガのく緑色をした長袖のシャツ、背中に向かって言った。

「もう！ おじいさんったら！ 失礼でしょ」

ジュナは唇を尖らせながらそう言って男をたしなめた。

「わるいわるい……変なつもりで言ったんじゃないんだ。ついな」

ごまかすように笑いながらそう言った。

男はこの港で漁師して生計を立てているようだ。

日に焼けた肌がよく似合う。

「ところで……」

ジュナは声を少し小さくしながら言った。

「今日は出たの？」

ガガの耳が”ピクリ”と反応する。

「いや。今日は出なかった。あいつが出てくると漁どころじゃなくなるからな……」

この話題はこの町を歩いてれば誰しもが聞く話題である。

なんでも近頃。

湖に中型の獣が住み込んでしまったようだ。

そしてそれが船を襲うと言う。

獣は、脅威だ。

小型の特に能力もない犬や猫も群れば恐ろしいかもしれないが、
この世界の獣の中には異質なものがあまりに多い。

「……」

ガガが何かを考えていると、

「それじゃ、戻りましょうか」

ジュナが男と別れを告げ、帰宅する事をガガに告げる。

どうやら考え込んでる内に話は終わっていたようだ。

「ああ……」

もう考えたのはやめたのか、何も考えてないようなボーンとした
顔で女が待っているであろう家へとジュナと共に向かった。

プロローグ：獣、二人、其の二へ

ブログ：獣、二人（後書き）

1 1 / 1 / 1 2

あらずじ追加。

1 1 / 1 / 1 5

話数変更、あらずじ削除

字数も大したことないし話で分けるのやめました
サブタイだけ残します

1 1 / 1 1 / 1 8

改行修正

ブローグ：獣、二人、其の二

目覚めてからどれだけたっただろうか。

女の体も徐々に動くようになっていき、上体を起こし、これからガガを探しに行こうかとした時。

「あ！ ほんとうに目覚めてた」

ガチャリと扉が開くとともに声が届いた。

女はビクリとしつつそちらを注視すると、明るい少女の顔と見知った男の顔が扉の先から現れた。

ジュナとガガである。

「もう体は大丈夫なんですか？ ずっと寝てたんですよ」

ジュナが優しくそう言うと女はふうと息をつきつつ、

「ずっと……って事はあれからかなりの時間がたっているの？」

それに対しジュナは、

「あなたはベッドの上で3日間も眠り続けてたんですよ。もう目覚めないのかと思っちゃった」

冗談めかしつつそう応える。

内容は明るくはないのだが、この少女が言うと不思議と悲痛さを感じなくなる。

そう女は思った。

「……それでここは一体どこ？」

目覚めてからずっと思ってた事を尋ねてみた。

するとジュナは女の目をまっすぐに見て、

「ここは港町クルメ。あなたたちは湖のほとりに倒れていたんです。それを私が見つけて、おじいさんが……この家の主ね、運んできたってわけです」

——あの激しい戦闘の後どうなったのかわからない。

なぜ湖のほとりにいたのだろうか？ガガからも早く情報を得たい。

が、その前に”そこ”に自分たちが倒れていて、ここまで運んできてもらった上に、ベッドまで貸してもらってるという事にお礼を述べておかねばなるまい。

「私たち、あなたに助けてもらったのね。ありがとう」

痛む体でなんとか頭を下げつつ言った。

「運んだのはおじいさんで、私は何もしてませんから。傷もほとんどなかったし」

そういえば、あれだけの逃亡と戦闘くこちらに参加はしていないが、があつたのに傷あとがまるでない。

寝てるうちに回復したのだろうか。

少し記憶があやふやだ。

「それでもよ」

傷あとについては首をひねりつつも、この子はその優しさできつと面倒を見てくれたのだろう。

想像するのは少女の目を見れば容易い。

「それに……」

女は目線をジュナの後ろに控えてる男に目線に向け、

「仲間も面倒見てもらってるみたいだし……」

仲間という言葉に違和感を覚えながらもそう言ってジュナに笑いかける。

するとジュナが何かを思い出したように、

「ああそうだった。まだ名前、言ってませんでしたね」

「私はジュナ。あなたは？」

丁寧に名前を名乗った上で女に名前を尋ねた。

女は目を伏せ、

「私は……」

「私の名は」

「シプリナ」

誰かが名前を呼ぶ。

「シプリナ……」

誰の名前を口の中で繰り返した時懐かしさを覚えた。

「私の名前ね……私は……私を呼んでるのは誰？」

質問をする。すると、

「……………急いで……………」

何か答えようとしているようだがその声はどんどん存在を小さくしていく。

「待つて！ 何を急げばいいの！」

しかしもはや返ってくるものはなく。

プロローグ：獣、二人、其の三へ続く

プロローグ：獣、二人、其の二（後書き）

1 / 17

文章微修正

1 1 / 1 / 1 5

文章微修正

1 1 / 3 / 4

名前ミス訂正

1 1 / 1 1 / 1 8

改行修正

プロローグ：獣、二人、其の三

「……」

「……ぶです……」

遠くから声が聞こえる。

「大丈夫ですか！」

その声がハッキリと頭に届いた瞬間シプリアは”ハッ！”として
ジュナの方とガガの方を順に見た。

ジュナは心配そうな顔をしているがガガの方はというと、こちら
を見ているのかいないのか。

ボケーっとしている。

「大丈夫。大丈夫よ、ありがとう」

そんな男の様子にどこか違和感を覚えつつも、この優しい少女に
心配かけまいと笑顔でお礼を述べ、

「私の名前はシプリア。さっきも言ったけど……というか言うまで
もないかもしれないけど」

そう前置きをしてから、

「そこにいる男の仲間よ」

ジュナはうなずき、ガガはひたすらボーっとしながらそこにいる。

ジュナはそこで一呼吸し、

「ガガさんからは聞いたんですけど、都市から西の国へ向かう途中
獣と出会ってしまつて命からがら逃げ延びたとか……大変でしたね」

どうやらガガが話を捏造したらしい。

当然の話だ。

どう来たのかわからないという怪しい人間をいつまでも泊めてお
けるはずもない。

拾つてくれた事自体奇跡に近い。

ここはクルメだという。

確かに帝国からは西に位置する。

高速馬く帝国の別名、城塞都市にて開発された人を乗せ走るマシ
ンだ。

近年の城塞都市の発展には目覚しいものがある。

噂では他国から技術を提供されているとの噂も……>で行けば一
週間というところだろうか。

「見つけた時すごかったんですよ、二人とも泥まみれで」

ジュナは話を続ける。

「ガガさんも目覚めていたんですけどぐったりしていて」

獣人の回復力は目覚ましいものがある。

だが、厳しい戦闘の後だ。

奇跡的に大きな怪我をせずにすんだのもあり、湖のほとりで見つかるまでに傷自体はふさがったのかもしれないが、さすがに疲れ自体は取れなかったのだろう。

「とにかく、本当に助かったわ」

シプリナは本心からそういったのだった。

簡単な自己紹介もすみ、ベッドに腰掛ける体勢で昼食をとった後、
＜食事は湖の幸をふんだんに使ったとてもおいしいものであった＞
シプリナはりハビリもかねてという理由で心配するジュナを説得し、
ガガと共に家のそばの通りに出た。

「さっそくだけど」

外に出てまもなくシプリナがガガに声をかける。

「あの後私たちに何があったの？」

本当に謎だ。

マグヌス公爵に追いつかれ転移陣もコナコナにされ……その後は……。

「あの後……俺は」

ガガはボソリと呟いた。

「あの後俺は負けた」

端的にしかしより疑問の深まる回答を得てシプリナは余計に悩む。

「負けたって……いや、マグヌス公爵に勝つ事は確かに現実的ではないけど」

しかし、

「それじゃおかしいじゃない」

一体——いったいどうやって。

「ならどうやって逃げ延びたというの？」

当然の疑問を投げかける。

「それは」

「あれは何だったんだ……」

広い石造りの豪華な部屋。

そこにこの男マグヌス公爵はいた。

巨大な体を持つこの男は巨体に似合う大きなテーブルの前に不機嫌そうな顔で腰掛けていた。

しかし以前と明らかに違うところがある。

それは顔半分が犬だったのが今はそうではないのだ。

更に腕も普通の人間と同じように先が5本指の手をした腕になっている。

こうして明るいところで見ると顔つきに威厳のあるまだまだ人生を半分以上残す、歳にして40程度の男であることがよくわかる。

「後一步だった」

呟きは止まらない。

「後一步のところで……」

マグヌスにとって見ればあそこまで追い詰めて逃がすなんて事はありえない事なのだ。

これは大いなる汚点である。

皇帝にはこの後会う事になる。その時なんと言い訳をするべきか――。

「まさか……突然声とともに消えたなどと言えるはずもない」

マヌグスの心労は尽きない。

時間はガガとマヌグスが対峙した頃へと遡る――。

――ドガン！

ガガの放り投げた鉄球がマヌグスのく顔の前で構えた>鋼鉄の腕にぶつかる。

しかしそれはマヌグスにとってはダメージではないようで力任せに払いのける。

するとそこにはガガの姿はなく。

ガガは鉄球が当たる瞬間、「クフツ」と短い含み笑いを吐き出すのと同時に、まるで大地にはじかれたようにして飛び出し、マヌグスの右脇側面へと回りこんでいたのだ。

そしてその勢いそのままに――マントの内側、腰あたりからだる

うか、先に鉄球<これもまた拳より少し大きいくらいの鉄球>がついた棍棒を出し”シュッ！”と、フックを描くように棍棒を空にスライスさせる。

このまま進めばマグヌスのわき腹に当たる軌道。

タイミング的にも当たるはずなのだが――

マグヌスは恐るべき瞬発力でバックステップを踏みそれを見事かわす。

その際ついとばかり左腕のハンマーを蚊を払うように軽く振ったのがガガには見えた。

ドドーン！

再び雷鳴になり、大地がはじける。

振った衝撃が大地を打ったのだ。

恐るべきその力。

ガガはというと体を間一発ひねってなんとか助かる事が出来た。

が、体ははじける大地と共に後方へと飛ばされてしまう。

中空にはじけ飛ばされながらもガガは再び攻勢へと入り、体を回転。

棍棒とは逆の手に持つチェーンつきの鉄球をその回転により生ま

れる遠心力で加速させ、マグヌスの首元に向け放つ。

「ガハア！」

強く息を吐いて振り切る。

しかし、鉄球はまたもや空を切ってしまう。

どうやらこのガガが相対している恐るべき力を持つ男は、恐るべき感をも持ち合わせているようだ。

「どうした。当てるんじゃないのか」

マグヌスは余裕の笑み浮かべつつ言い放った。

ガガも歪んだ笑みだけは消さないが、状況的には決してかんばしくない。

あのハンマーだけでも脅威だ。

加えて身体能力もまだまだ底を隠した状態なのに今のガガより圧倒的優位にいる。

「鋼蛇の力を出せ」

マグヌスが低く、しかしよく聞こえる声の大きさをガガに話しかける。

「貴様はまだ一度も出していないだろう」

鋼蛇の力とは？

志向性を持つてるとしか思えない衝撃の力のようなものを指すのだろうか。

しかしガガは応えない。

ただ微笑むばかりだ。

「出さぬまま死ぬか？ 心残りになるぞ」

問いながらナグヌスは考える。

出さないのではなく、出せないんじゃないか——と。

何せこの状態だ。

出さない方がおかしい。

なのに出さない。

となるとやはり大きなリスクがあると見るべきか。

「まあいい。それならそれで。このまま吹き飛ばすまでだ」

その言葉を最後にマヌグスからは余裕が消えた。

ついに始末にかかろうとしている。

——ガガたちから少し離れた岩場の陰

「……鋼蛇？」

聞きなれぬ言葉だ。

だが疑問を浮かべている余裕はない。

「やはり公爵相手じゃ」

今日の前にせまった危機の方が明らかに問題だからだ。

先ほどの赤い戦士たちを倒したときの動きを見てもしかしたらとも思ってたのだが甘かった。

あまりに次元が違う。

「まさかこんな化け物だったなんて。これなら中型サイズの獣<一般的家屋より大きい獣以上小山未満>を倒せるという噂も確かなのかもしれない」

それにしてもなぜガガは獣人化しないのだろうか？わからない。

ドガァーン！

マグヌスのハンマーが大地を揺らした。

「あうっ」

その拍子にシプリナはバランスを崩し岩に頭をぶつけ——次第に意識が遠のいていく。

「うう……なんて……こと……」

ゴゴゴン……ゴゴゴン……

大地がゆりかごのように揺れる。

公爵とガガの戦闘は続いているのだ。

ゴゴゴン……ゴゴゴン……

形勢は先ほどと変わらない。

いや状況はシプリナにとっても悪くなって来ている。

さきほどより積極的にマグヌスが攻撃を加えていることが理由だろっ。

そうして刻一刻と味方の最後の時が近づいていく中。シプリナの意識はまどろみの中へ——

……

ボウウウウン……

完全に気を失うとシプリナの体は淡い緑に輝きだした。

それは本当にささやかな光。

そして。

プロローグ：合間に漂うものたちへ続く

プロローグ：獣、二人、其の三（後書き）

1 / 17

文章追加修正

1 / 1 / 1 / 4

句読点一部追加

1 / 1 / 1 / 5

文章微修正

1 / 3 / 6

文章微修正

1 / 1 / 1 / 8

改行修正

文章微修正

プロローグ：合間に漂うものたち

――皇帝の間

「ふん、そう」

マグヌス公爵の部屋とは比べ物にならないほどの広い空間。

思いのほか装飾に派手さなどがないのは皇帝の指示だろうか。

しかし圧倒的な威厳。

重苦しい雰囲気だけは装飾に関係なく確実にある。

公爵ですら額にじんわりと汗を浮かべているくらいだ。

「仕方ないよね、それじゃ」

そんな場所には明らかに不釣り合いな子供の声が響く。

玉座。

そこに子供が座っている。

金色の毛髪。

肌は子供らしくふっくら。

小顔にパツチリした目。

目じりには赤い化粧。

口はややアヒル口。

一見ひたすらかわいいただの子供。

ただ格好が一般人とはまるで違つとひと目でわかる。

きらびやかな装飾きらめるお召し物。

そう。

皇帝とはこの子供の事なのである。

「し、仕方ないとは……」

＜どうやらバカ正直に皇帝に報告したようだ＞公爵は、玉座の前に
跪き畏まりながら皇帝に尋ねた。

「仕方ないとは仕方ない。そのままの意味だよ公爵」

これ以上なにもお前には言う事はない。

そう言うつかのようにマグヌスの目をじつと見つめる。

マグヌスにはなにがなんだかわからない。

しかし許しがおりたのならこれほどよい事はない。

「ありがたき幸せ！」

そう一言だけ伝え、跪いた状態で頭を気持ち下げた。

数秒その状態を保ち顔を上げると皇帝の顔には――飽きが来ていた。

「もう下がっていいよ公爵」

これで終わりといわんばかりに手を払う動作をする。

すると閉まっていた扉がゆっくりと開く。

「は、はっ！」

返事をすると同時にガバリと立ち上がりお辞儀をしたのち、やや急ぎ足で扉へと向かい皇帝の間を後にする。

その後マグヌスが出ると同時に扉がまたゆっくりと今度は閉まっていく。

公爵が扉の先で皇帝に向けこうべを垂れているのが見える――そうして扉は”ガコン”という小さい音と共に完全に閉まった。

「やっぱり邪魔が入ったね」

皇帝はその扉をぼんやり眺めながら呟く。

「クロリスと会つのはまだまだ先のことになりそうだ」

聞きなれぬ名前を誰もいない空間に語りかけほくそ笑む。

「公爵」

扉の先から公爵の部屋へと向かう途中影から女と男く赤い髪の女は軽装で兵士というには小柄だがまどつてゐる気配は常人のもではない。

一方男の方は全身黒い布に覆われていて目の部分だけ開いている。

こちらはこちらでやはり普通とは言いがたい雰囲気を持つゝが出てくる。

どうやら公爵を待っていたようだ。

「陛下からはどんなお言葉を？」

赤い髪の女が尋ねる。

「お許しが出た」

予想外だったのか反応こそなかったが女は数瞬言葉に詰まる。

その反応がくる事が分かっていたのだろう。

一度うなずいた後に、

「陛下の御心はわからん。しかし陛下がお許しになってもこのままでは他の貴族どもが黙ってはいないだろう」

マグヌスの座を狙う人間はいくらでもいる。

なぜならこの世界では力が能力さえあればいくらでも立場をひっくり返す事が出来るからだ。

しかし、マグヌスは力で成り上がった公爵クラス。

力で対抗するのは難しい。

ならばそれ以外の方法で攻めるしかない。

すでに冷静さを取り戻した女は、その事を理解しその上で「では早速私が」と自身が追撃に出ると訴えた。男の方も無言だが目に戦う意思が見える。が、

「いや、いい」

マグヌスはそう否定の言葉を述べると、

「クスタヴィを呼べ」

女の目を見てそう言った。

夕方、ジュナの家にて。

「そんなに違うんですか？」

シプリナが借りている部屋でシプリナとジュナが会話している。

「そうなのよ。妙に人間くさいってゆーか」

ガガについての話題のようである。

そのガガはといえば、シプリナが気絶してしまった後どう逃げたのかを軽く話した後、ジュナの祖父を手伝う為、再びどこかへ行ってしまった。

結局どう逃げたのかはガガもよくわからないらしくあやふやなままだ。

「人間くさいって、普段はあんな感じじゃないんですか？」

シプリナが知っているガガは無口で突然地面の匂いを嗅ぐような男だ。

あまり話してないとはいえちゃんと会話する上に妙にボケーンとしてるのはイメージとまるで合わない。

「う〜〜む」

人差し指を眉間に当てうなる。

そもそもなぜガガの話になったかと言うと、ジュナが年頃の女の子らしい恋愛話に話を向けたからだ。

関係を聞かれ、あんな暗い人間とは付き合えないと答え「ええガガさんとっても優しいじゃないですか」とこれまたイメージにない言葉を聞かされ——どう違うのかと言う話に至る。

「あいつが……優しい、か」

そうしてボンヤリしていると”ガチャリ”と遠くで扉の開く音が聞こえてきた。

「あ、おじいさん帰ってきたみたい」

いつも帰ってくる時間なのだろう。

シプリナに目で挨拶し出迎えに向かう。

シプリナも考えるほどの事ではないと一笑し、ジュナの後について行くことに。

「おう、今帰った」

玄関へ向かうとたくましい顔を悔しそくに歪める男がそこにいた。

ジュナの祖父だ。

後ろにはガガ。

「ダメだ。獣を怖がって漁になりやしねえ」

入るなり愚痴るように言い放った。

獣とは荷物を届ける際ジュナと話していた例の話の事だろう。

近頃湖に出没し、船自体を襲うのだと言う。

そうして乗組員が逃げ出していった船を湖の底へ引きずり込むとか。

「こりゃあ都市に連絡してやるしかないか」

！？

それはまずい。

シプリナは思う。

今呼ばれると自分たちの存在がバレる可能性もありうる。

そうシプリナが焦りを見せた瞬間。

「絶対いや！」

ジュナが血相を変えて言う。

「呼んだら……獣人の……鋼蛇まで来てしまうかもしれない」

！

”鋼蛇”という単語がジュナの口から発せられた途端”ガタ”と傍にある机を揺らしガガが反応する。

獣人を知ってる人間はいる。

しかし鋼蛇という名をなげ。

その様子を見てたシプリナはガガと違い「鋼蛇？」と聞きなれない単語に首をひねっている。どこかで聞いた記憶はあるのだが――

「しかしどこで……………あ！」

マグヌスだ。

あの公爵がガガに対して言っているのを思い出した。

当時はそんなことに疑問を持つ余裕すらなかったが。

ガガやマグヌスのような獣人＜獣人化できる人間の俗称＞は増えたとはいえ全体から言えばごく一部にすぎない。

都市にいた人間でも言葉くらいは知っても実物、それも変体した姿や能力を見る機会なんかほとんどない。

中規模の街なんかでハンターを雇った時、その中に緑の石使い＜石を機具や不可思議なアイテムなどを用い（後者は噂の域を出ない）極めて限定的に能力を使えるが、獣人化できない（よって肉体の強度などは人間のまま）人の総称＞が数人いる程度だ。

小さい町なんかではその存在すらあまり知られていないくらいで、都市にいたらしいシプリナもあまり知っていないようだ。

小さい町で知られないのは獣に出会う頻度の差に尽きる。

この町は小さくはないがやはり皇帝がいる城砦都市付近ほど凶暴な獣も出ない。獣はなぜか城砦都市など技術が発達した都市付近に出没するのが分かってきている。むろん、まるで出ないと言っわけではないが。

ともかく必要ないのだ。獣人など。

しかも”獣人が”と言った上で”鋼蛇まで”と言った。

そんな言い方をするという事はこの少女は鋼蛇とは何かまで知っている可能性がある。

だがなぜこの少女が……。

「しかし他になんとも手がねえ。あのサイズの獣でハンターを雇うとなると相当数雇わなきゃ逆にやられる」

「そんな金はこの町にはありやしない。その点帝国の部隊なら時間こそかかるものの金は大してかからんで済む」

帝国は緑の石を集めているから中型までなら可能な限り狩ろうとする。

城塞都市の付近では数が多すぎて多大な被害が出てしまう。

そこで少し離れた場所にいる。

中型以下の孤立した獣を狙うのだ。

中型なら相当量の石が手に入る。

それに濃度も高いだろう。

疑問はジュナの祖父の声で打ち切られる。

「でも……でも……」

ジュナが嫌悪感を隠さずつつむく。

なにやら裏があるようだが、しかしこの場で問いただすわけには行かない。

「……」

ガガは沈黙している。

なにやら考えを巡らしつつ。

後、シプリナが目覚めたことに今更ながら気付いたジュナの祖父<名はデイモだそうだ>は先ほどの深刻さなどまるでなかったかのように笑顔で、まるで自分のことのように喜びこの町まで逃げ延びた労をねぎらった。

ジュナも気付けば笑顔だ。

それは食事の時間になっても変わらず、とてもにぎやかなものとなった。

それと言っておかねばならないことがあるが、帝国はたいてい自発的には来ない。

いくら魅力的な獣がいようともだ。

答えは単純に、部隊の数をそうそう割くわけにはいかないからだ。先に行ったとおり帝国の周りには獣が大量にいる。

抜け道や高速艇があれば、来る事は昔ほど難しくはない。

しかし守りも貴重な高速艇も有限なのだ。

それを危なさそうだからと言う理由で距離のあるところに、ポンポン派遣するわけには行かないのだ。

そこでジュナの家のようにその町の代表たちく代表と言っても他に大それた権限を持っているわけではない>が相談し合う。

帝国にもたらされた簡易的な通信手段を用いて呼び出す手はずになっっているのだ。

当然、帝国に虚偽の申請などはゆるされないので慎重に行う必要がある。

……

.....

..... 沈黙。
夜。

ガガはそつと家を出た。

プロローグ：合間に漂うものたち／其の二へ続く

プロローグ：合間に漂うものたち（後書き）

1 1 / 1 / 1 2

あらすじ追加

1 1 / 1 / 1 5

文章微修正

あらすじ削除

1 1 / 3 / 6

後半部説明文一部追加

1 1 / 1 1 / 1 8

改行&文章微修正

後半文章追加

プロローグ：合間にただよつものたち／其の二

月明かりに照らされた湖。

その前にある船着場。

そこにガガはたたずむ。

何かを待っているのか、それともただ風景を見ているだけか。

それはガガにしかわからない。

そうしていくばくかの時間を過ごした後、おもむろに懷から緑色の石を取り出した。

するとタイミングを計っていたのだろうか、声が発せられる。

「ねえ、気付いてるんでしょ」

ガガの立っている所から数メートル離れた所からシプリナの声が届く。

湖と同じく、月明かりに照らされながらたたずんでいる。

美人だ。

哀れにも変わり者の男と共に過酷な逃亡を強いられているこの女の歳は20〜25と言った所だろうか。

目鼻立ちといいなかなか整っているどこか儚げな印象を持つ顔立ちで、肩甲骨ほどまで伸びる赤みがかった茶色い髪を紐でまとめている。

泥まみれじゃない素顔は雰囲気と相まって人の目を引くには十分な魅力があると思う。

残念な事は、今ある目がどうしようもないほど無感動な目をした男の物だけだという事か。

「緑の石だ」

ボソリとガガが呟く。

独り言に近いつぶやき声。

「これを見る。やつらはこの緑の石を狙う」

シプリナは近づいて行き促されるようにしてガガの手のひらに収まるその石を見る。

「緑の……石を？」

月明かりが反射しキラキラと緑色に光っている。

「そうだ」

緑の石とは獣が死んだ後時々結晶化したもののを精製した物質の事である。

エネルギー源として使えると言う事で近代船などに使われるのが主だ。

ソレを獣が狙うと言うのは初耳である。

……なぜこんな物を？

その問いにガガは応える。

「これを食らうと獣は進化する。……それは生物の本能が求めるものの」

ゆっくりとした間をおき、話を続ける。

「だからそれを一つの土地に集中して集めれば……その巨大な石を求め必然的に獣も集中する」

シプリナは首をひねる。

「進化つて……あの石はただのエネルギー源じゃなかったの？ そんな話」

聞いたことない。

それはシプリナだけでなく知らないのがこの世界における常識だ。獣との戦いの歴史は知っていても獣が人を襲う理由まで知っている人間はいない。

獣は獣。

人を襲う物。

しかし。

ガガは知っていた。

なぜ？

内容そのものよりそちらが先に疑問として浮かぶ。

今日だけの事ではなく、転送陣の件もそう。

なぜ知っているのか。

獣は脅威であり人類は獣との戦いに明け暮れてきた事は当然知られている。

そこまでのはずだ。

ひたすら驚きを感じる。

同時に、今現在それとは別の驚きも味わっていた。

「……それにしてもホントに草原の時とは別人みたいね」

他の疑問を解決したいのも山々だがどうしようもない違和感がある。それは集中できない。

話し方も立ち居振る舞いもやはり草原のときとはまるで違っているか。

「獣人にもタイプがある」

またもガガは素直に応じ答える。

獣人化し戦闘になってもまるで性格を変えない者。

戦闘に喜びを感じ荒れ狂い、獣のようになる者、まるで人形のように感情が消え失せる者がいる、と。

シプリナは黙る。

ならガガは二つ目のタイプに近いな、などと想いをめぐらしながら――

「……あなたって何者なの？」

しばしの沈黙の後、すべての疑問につながる質問が自然とシプリナの口からこぼれる。

しかし。

「いずれ……わかる」

今度は先ほどと打って変わって答える気はなさそうだ。

というより答える場合ではなくなってきたのか。

気付けばその場の空気の流れが変わっている。

ガガはなにかの気配を窺っているようだ。

空気にあわせ話は強制的に終わり、先に出てきた疑問に対する答えも聞き損ってしまったシプリナはため息をつき、この後の事に想いをせつつ尋ねた。

「それで、戦うの？」

ガガがこの場へきた理由。

ソレは一つだけであろう。

少女たちが話していた”獣”である。

「あの子達のため？」

言いながらこの男になんてふさわしくない言葉だろうかと思った。

が、今のこの男なら、とも思えるのだから不思議だ。

しかし、

「緑の石は俺の好物……だからだ」

返ってきた言葉はまるで意味のわからない言葉だった。

照れ隠しにしてもやはり意味がわからない。

「どういつことなの、それ」

思ったままに今度は返答にまるで期待せずに投げかけると、

「それもまた、いずれわかる」

実にあいまいな返事だ。

ただわかったこともある。

戦うつもりなのは確かなようだという事。

「これは……人類を、世界を飲み込もうとしている」

「なぜなら進化の先には滅び」

「ソレそのものである獣は、進化ではなく生き延びるためにつかう人間を許さない」

口の中でだけの呟き。

シプリナには聞こえない。

「残念だが話はここまでだ……来た。お前は逃げろ。獣人化する」

「何……あれ」

シプリナの目線の先<船着場からは少し離れた場所>にはタコと
いのししを混ぜたような異様な獣がいる。

獣とは種類を大きく分けて大型中型小型と分かれる。

小型サイズは<一般的家屋より小さい獣>

中型サイズの獣は<一般的家屋より大きい獣以上小山未満>

大型は<小山以上すべて>

その中でノーマルタイプと魔獣タイプに分かれる。

ノーマルとは火を噴いたり出来ない自身の力で相手を攻めるタイ
プであり魔獣はその逆。

ただし獣はガス状のものや噂では見えないものまでいると聞く。

そこらへんの線引きはあやふやだ。

なにせすべてを把握してる人間はいないのだから――

「ば、化け物……」

シプリナが思わずつぶやいたのも無理はないだろう。

目の前には中型だろうか。

城壁の内側で生きていればまず見ることもないような巨大な獣。

そんな物がほんの10メートルも離れたところにいるのだ。

正気でいられるものではない。

普通ならば。

都合がいいことにここには普通でないものがある。

当然ガガだ。

なにやら口をもごもごさせながら獣を凝視している。

髪の毛を逆立て、なにやら全体が緑色に淡く発光している様に見える。

「ううううう……」

うめき声は獣のよう。

目つきも変わり、そして。

「ハ！ ……ハハッ！！」

息を吐き出すように不気味に笑い出す。

そして、

ゴッ！

シプリナは化け物に釘付けになり逃げる事も忘れていたが、化け物の湖から露出した胴体の人間で言う鎖骨の部分<はたしてそれが鎖骨なのかは不明だが>に黒い塊がぶつかる鈍く重い音によって目を覚ます。

今、湖と陸地という、まるで異なる世界に属した獣が2匹。

夜空の下、あまりにも奇妙で不気味な生存競争に臨もうとしている……

プロローグ：少女と鋼蛇へ続く

プロローグ：合間にただよふものたち、其の二（後書き）

1	1	1	1	4
改行修正				
句読点一部削除				
文章一部追加				
1	1	1	1	8
改行&文章微修正				

プロローグ：少女と鋼蛇

緑の石とは。

アダンくこの世界の名前くにおける貴重なエネルギー源である。

この世界はあまりに広く。人に優しくない環境があまりに多い。なにより獣が場所を選ばずうつろっている。

そんな世界において暮らしのためのエネルギーはもちろん、都市や街どうしを繋ぐ高速艇く荷物運搬は当然の事、人の足では追いつかれる獣への心配をある程度なくす事が出来るく、獣に対抗するための兵器を動かす為に利用されている。

——ちなみに獣のおかげか国家間の争いが少ないというのもこの世界の特徴だ。長い歴史の中でも戦争と呼べるものは数える程度。そういった意味では平和な世界なのかもしれない——

さらに大都市部の人間の中での一部では、さらに特殊な力を得られるという事が知られている。

一つは獣人のことだろう。あとは？

ともかく、以上が石についてわかっている主な事柄であり、その他は一切は謎のままである。

ゴシヤア！！

鈍く重い大きな音を立ててガガの背後に位置する木が砕ける。

化け物（巨大タコイノシシ）が背中にはやした触覚で貫いたのだ。

ガガといえば、触手の一撃をひらりとかわすとまたも鉄球を投げる。

ゴンツと大きな音とともに眉間へと直撃し、タコイノシシは吼える。

どうやら戦闘はガガが優勢に進んでいるようだ。

その様子を少し離れた位置から見ていたシプリナは「獣人化するといったけど、あまり姿に変化はないのね、と妙に冷静に考えていた。

それもこの戦況のおかげだろう。

正直な話、いかにガガとはいえ獣相手では分が悪いと思っていたからで余計に、である。

以降もタコイノシシが攻め、ガガがかわし鉄球を投げつける。

その一連の動きの繰り返し。

動きは実に滑らかに見える。

体を捻り無駄な動作なくかわし、攻撃する。

シプリナには戦闘の事はよくわからない。

ただ、”すごい”と思うだけだ。

このままなら案外簡単に勝ち、ジュナへ明るい報告が出来るかも……。

そんな楽観的な思いが確信へとかわりつつある。

そんな矢先の出来事。

ザバツ！……ザバ、ザ……

タコイノシシが動きを止めた。

「ハッ……ハハッ……」

突然の行動に、シプリナはどうしたのだろう、と少し警戒をする。

ガガはあいかわらずの様だが……。

相変わらず薄気味悪く笑いながら息を吐き、身を低くして動向を探っている。

そうして数瞬、変化は起きた。

？

! ?
...
!

タコイノシシではなくガガに、であるが。

ガガは宙を舞っていた。

一体何があつたのか。

衝撃を受けた本人はわからずとも、距離をとっていたシプリナにはかすかにだが見えていた。

巨大な触手くのようなものがタコイノシシの背後から触手よりも速いずつと速度でガガめがけて飛び出したのだ。

だが明らかに触手と比べて大きすぎる。

まさか……。

ガターン！という音とともにガガは廃材置き場へと落ちた。

受身は取っていたようだが衝撃でガガも動きが止まってしまった。

そして。

ザバ アアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアア！！

ガガがよろめきつつ立ち上がるうとする一方で、大きな水の音とともにタコイノシシがなにやら動き始めた。

立ち上がったのだ。

すると鎖骨らしきものより下の部分が現れ、

なんだこの大きさは。

そう言うほかない巨体を見せる。

赤茶色の毛に覆われた圧倒的存在。

「大型」

ガガがつぶやくのと同時か。

シプリナの顔色は絶望色に染まった。

ここで一つ捕捉を入れよう。

獣には小型と大型が要するという説明はしたはずだ。

その中でも特に問題なのが大型の獣である。大きいとはそれだけで凶器なのだ。

事実、大型の獣が寝返りを打ち、その時代で一番隆盛を誇っていた巨大都市を一つ滅ぼしたという伝説すらある。そしてそれはあながちただの伝説とは思えない。

10年ほど前だろうか。ある大規模な街が、その街の近くでひた

すら眠りこけている大型<小山というにふさわしい大きさで大型の中では小型>に、

その時点で最高の兵器でもって移動してもらおうという話が持ち上がった。技術力の高い街だったのだ。

ちなみに大型のなかにもいくつか種類があり、その中でも一番巨大な災害指定絶望種に対しては基本的に倒すという発想にはならない。有史以来倒したという記録もなくなる。そもそも大型は気まぐれで面倒くさがりなのかめつたな事では行動を起こさない。その気性のせい、根も葉もない噂の中ではなんと、大型の獣の背中で暮らしている人々もいるとか……これはさすがに噂の域を出ない話だ。

ともかく、そういったおとなしさのような物にある種の油断をし、技術力にも自信があったのだろう、愚かにも兵器で脅かせば動くのではないかと考えてしまったのだ。

——街のあった場所へと翌日訪れた人間は見た。

いや、見る事が出来なかった。なぜなら街は消えていたからだ。

食われのか。丁寧に潰してまわったのか。方法はわからない。なにか力を使ったのかもしれない。

ともかく何もかもなくなっていた。

そういった事実があるからこそある程度の規模以上の街に住んでる人間は先の伝説を疑っても笑う者は誰もいないのだ。

大型の中でも巨大な獣は比較的数量も少ない事もあり小さい街の人間などとは見かけること稀なので、そういった人間は冗談と笑う事もあるかもしれないが。

大型は気にするな。それが世界中にある人間の共通意識である。

正確には大型ではない。

なぜなら大型ならばその動き一つで港町程度なら吹き飛ばししかないからだ。

それでもでかい。

胴体はイノシシ寄りに見える。

四足の獣のような胴体の形をしている。

そして、胴体の先端部分で顔だと思っていた部分の下に巨大な口<目玉はみつからない>が現れた。

どうやら上の部分は顔もどきで本物ではなった様だ。

食虫植物よろしく人間など獲物が止めというエサに惹かれて近づいてくるとその胴体中腹より下にはやした無数のより太い触手の一撃で粉碎すると見える。

この世界で絶対的な存在である大型の獣がそのような真似をする理由は不明だが……まさか性格が悪いとでも言うのだろうか。

町の人は知っていたのだろうか。

いや、知らないだろう。

知っていたならまずこの土地に住み続けようなどと思わない。

シプリナは震えるあごをきつくかみ締め、絶望とひたすら戦っている。

これはダメだ。

シプリナならずともそう思うだろう。

タコイノシシならぬ巨大な口の化け物も、なんとなくだが余裕を持っている様に見える。

しかしこの期に及んでまるで気にせず事態を楽しんでいるかのように見える男もいた。

「ヘッ……ハアーツ！」

不気味な呼吸。

ガガは体勢を立て直している。

何をするつもりなのか。

何が出来るといふのか。

タコイノシシの足が一本だけゆっくりと動く。

すべてをなぎ払おうとするかのように大きく振りかぶる。

長い長い足。

シプリナまで届くだろう。

覚悟をしている暇も余裕もないのが実に残酷である。

そうして大概の人間に対してこの世とのお別れを強制的にさせるであろう大きな鎌ははじめは緩やかに。

しかしスナップを利かせ轟音とともに向かってくる。

それとほぼタイミングを同じくして、

「貴様の待ち望んだ時間だ。きりさく魔刃となれ！ディエール・ジヤゲン！！」

今まで動物的で戦闘狂の様だった男の目に力強さと冷静さが宿り誰に向かって発しているのか言葉を発する。

するとまたもや体の周りを緑色に発行させ、一瞬のうちに見上げるほどの高さまで飛び上がり、

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

化け物の振り下ろした鎌は大きな叫び声、大きな落下音とともに湖へと沈んでいく。

チェーンの先の鉄球が、投げられている間に明らかに元のサイズとは合っていない、目の前の獣を切り裂くのに見合った巨大な刃へ変わり切り裂いたのだ。

「な、なにをしたの？」

常人の目しか持っていないシプリナはいつも置いてきぼりになるしかない。

化け物かというと叫び声とともに身をよじりながら暴れ、水の中へと逃げ込んでいくではないか。

ガガの方は、逃がすまいとするも体が言う事を利かないのだろうが体をグラつかせ、その場にひざを着く。

獣の正体が唐突にわかり、唐突に撃退されていく。

あまりにも速すぎる展開。

シプリナの恐怖で青ざめた顔はいまだにそのままだ。

こうして獣二匹の一戦目はあっけないほど唐突に幕を下ろした。

プロローグ：少女と鋼蛇―其の二へ

ブログ：少女と鋼蛇（後書き）

1 1 / 1 / 1 5

文章微修正

文章追加：大型獣への補足説明

1 1 / 3 / 6

設定に合わせ微修正&技セリフ変更&他本文微修正

1 1 / 3 / 2 9

後半部修正

1 1 / 1 1 / 1 8

改行&文章微修正

プロローグ：少女と鋼蛇く其の二

「ええ！！？」

ベッドで寝込んでいる男の脇で心配そうにしている少女ジュナは、シプリナから事の顛末を聞くと、目をこれでもかと言っほど見開き驚きの声を漏らす。

瞬間、年頃である少女はそんな自分のリアクションを恥じてか顔を少し赤くし、軽く咳払いしつつ「昨日の夜……そんなことが」と聞かされた内容を改めて反芻する。

よほど信じられない事なのだろう。

ガガとシプリナの顔を何度も何度も交互に眺める。

「ホントに信じられない……よく、バチューと戦って生きて帰ってこられましたね」

バチューー。

あの大口の化け物はバチューと言っらしい。

思っってたよりかわいらしい名だ、とシプリナは思っ。

なんでもこの土地古来から語られ恐れられてきた病気を振りまく厄災の神様の名前らしい。

確かにあれは厄災そのものだ。

性格悪かったし……とはシプリナの心の声である。

「まさか顔だと思っっている部分が偽者だとは思わなかったわ」

シプリナは思い出しながら体を小さく振るわせる。

「町の人もそこまでは知りませんでした……すぐに船を壊されて命からがら逃げたといっていましたし」

「ある意味運が良かったのかもしれないわ。あの口見たらもう漁に出られないかも」

苦笑しつつシプリナは冗談なのかわからない事をつぶやき「でも、その、バチュー？が逃げちゃって」と惜しい気持ちを口にした。

「それでも十分すごいですよ！」

「以前武装した船を六隻も同時に沈められちゃったんですよ？」

少し興奮気味のジュナの表情は面白いようにコロコロ変わる。

その驚きは増すばかりだ。

無理もない。

昨日までどうしようもないと嘆いていたものが、寝て覚めてみれば自宅に泊めた病み上がりの男によって倒す寸前まで行ったという

のだ。

驚かない方が無理がある。

そうして興奮したジュナはいくつか会話をしていくうち、口を滑らすようにつぶやく。

「今なら部隊なんか呼ばなくても……」

普通なら流すような小さな言葉。

だがベッドに寝ている男には違ったようだ。

「獣は弱つてからが恐ろしい」

「え？」

ベッドの上から声がかかる。

「きつと奴は死に物狂いで来るだろう」

「それをはたして町の人間や近隣のハンターだけで対処できるだろうか」

ガガの視線は少女の目に向かう。

しかしそれは少女の目を捉えているのか、はたまたその後ろを見ているのかどうか定かではない。

「……部隊を呼べば間違いなく、片がつく」

あのサイズだ。

緑の石を使う人間の中に獣人が混ざってきてもおかしい話ではない。

「帝国の部隊。並みの連中ではない」

先に体験済みの男の口から出る言葉。

その場にいたシプリナからすれば説得力にあふれている。

獣人化した男が一人であの恐ろしさだ。

もし複数人の獣人と出会っていたらたして今この世にいたのだろうか？

「何を恐れる」

ジュナは答えず、うつむく。

「お前は何を知っている」

どこを見ているのか定かではないガガの目は、しかしジュナの背後にある闇は見抜いているようだ。

そんなガガをジュナはゆっくりとだが顔を上げ、見る。

にらむと言ってもいいほどだ。ガガにダブラせ見ている何者かを。

シプリナは心配そうに「ジュナ……」とつぶやく。

「ガガさんは」

一瞬の間。

「ガガさんは知っていますか？」

しばらく沈黙、思いつめた様子でジュナは話す。

「鋼蛇を……」

ガガは上半身を起こし、ジュナに先を促すように見つめる。

「鋼蛇は私の」

「私の両親を殺しました」

「獣に対抗するくらいです。ガガさんは緑の石を使うのでしょうか？」

ジュナは両親についての告白の後、二人をつれ町の奥まったところにある町にそぐわない比較的大きく立派な屋敷へ向かった。

「それもかなりの使い手」

「親を通じて緑の石使いの強さは聞いていましたが、まさかバチューを一人で……」

ガガは獣人の再生力も手伝い、元々大きな怪我をしていなかったのが幸いしてか動けるようになっていたので肩を借りずに歩けている。

ガガが獣人だと知らないジュナは緑の石の能力の一つだと思っているようだが。

背丈より大きい銀色の門。

其の先にあるく庭は荒れている。大きな扉を開け中に入ってみると、あまり掃除をしていないのか少しカビ臭いにおいが生ぬるい風に運ばれ鼻に届く。

室内は棚に囲まれててその棚は本がぎっしり詰まっている。

二階まであるようだが二階も一階と同じく本だらけに見える。

「この奥の部屋です。」

ちょうど入り口からまっすぐ進んだ所にある扉の先にはなにやら機械が整然と並んでいる。

「父と母は帝国で働いていました」

「父は元々この町の人間で、子供の頃までは住んでいたらしいんですが、その秀才ぶりは大人になる頃には帝国まで届きそちらで働くようになったんです」

そこの研究所で母と出会い夫婦となったという。

ジュナは元々帝国で生まれらしい。

といつてもジュナをきつかけに夫婦はこの町へ戻り屋敷にてこのあたりに豊富にある資源の研究をするようになったので住んでいたのはほんのわずかだが。

それにしてもその夫婦、帝国から一任されるくらいだ。

よっぽど優秀だったのだろうか。

そんな夫婦はいつものように成果を手都市へ向かい、

「……もどつてきませんでした」

ジュナの顔に影がさす。

シプリナは同情的だ。

ガガは、やはりというべきが無感情だが。

「そのあと帝国の人がこの屋敷まで来ていると持って行きました。イヤだったけどそれ以上に思い出したいくない事でしたし。仕方ない、と思うことにしました……」

どんな事故で死んでしまったのか尋ねもしませんでした、と続ける。

「けど」

「読んでしまっ たんです」

ジュナの目線は部屋奥右側にある棚へ。

「以前ここに遊びに来たときがありました。いつも来るときは事前に伝えておくのですがそのときはこっそり」

言いながらその棚く右隣には棚一つ分空いて機械が置いてあるくへと向かい、棚左側く横は壁で隙間があるくの床にしゃがみこんだ。すると、

ガコン。

何か錠が外れたような音がした。

ジュナは立ち上がり棚を右へと押した。

ゴトト、ゴト。

するとそこには埋め込み式の棚が現れたではないか。

黙ってジュナの話を聞いていたシプリナは目を見張る。

「母が同じように開けるの、帝国の人が来て、しばらくしてから思い出したので」

その目線は棚の目的の位置へと動き、

「ほんの気まぐれで開けてみたんです」

右手を棚中段にある一冊の本へと伸ばす。

「帝国の人は他の書類などで満足してしまったのかあまりこついたものまでは調べなかったみたいで……」

「おかげで父と母がなぜ死んだのか、そのヒントが書いてあったんです」

少女の悲しみの記憶が今紐解かれる……。

プロローグ：少女と鋼蛇其の三へ続く

ブローグ：少女と鋼蛇／其の二（後書き）

1 1 / 3 / 6

設定に合わせセリフ等一部修正

1 1 / 1 1 / 1 8

改行&文章微修正

プロローグ：少女と鋼蛇／其の三

以下、父母の町の奥にある家の本棚にあった日記……らしきもの（よくわからないメモもたくさん書いてある）に書かれている事柄から抜粋――

……

……

……

人類は獣との戦いに次第に疲れ始めた。

勝ち目がないからだ。

そこで帝国は名のある科学者、技術士をかき集め、ある研究に着手する。

それは獣の力と人間の知能を混ぜるというものだ。

獣でわかっている事といえは？

強大な力。

それに緑の石を生み出しそれはエネルギーや武器・機具などを用いることで限定的にだが、一時的な身体能力上昇や魔獣のように（

比較にならないほど威力は低い）対象を非科学的な力で破壊等する事が出来るゝへと変えることが可能であるということ。

それくらいだ。

だが高い知能があるという例は今のところ発見されていない。

……人という種がここまで絶滅せずに残ってこられたのは、知能という点で勝っていたからだとわれわれは信じて疑わない。

そして、今までの敗北の歴史は決して永遠のものではないと。

（省略）

それから研究に研究を重ねる毎日。

つらかった。

しかし妻が……常に私の傍には妻がいたしそれにお腹には……。

ともかく研究は続き、そしてあるとき実験は大いなる成功の兆しを見せ始めてきた。

（省略）

ちなみに被験者Aはサンドウィッチが好きらしい。

彼は国の為に自らの体を提供してくれた。

彼のためできるだけのことをしてあげたいものだ。

（省略）

するとどういうことか。

その石を体の一部とを部分融合させ、能力を発動しようとする
融合箇所は獣へと変質、果てしない力を得る。

緑の石使いとはまるで別物だ。

変体した状態ならば暗闇でも能力を使わず周囲を見渡し、身体能
力も飛躍的に上昇。

しかも継続的だ。攻撃時に一瞬だけ上昇させるのとはワケが違う。

ただ魔獣タイプの因子は人間にはあわない物が多いらしく、あく
までノーマルタイプの獣と合わさる事で能力が一つ開花する事の方
が多いようだ。

（省略）

この一連の流れの作業はプロジェクト鋼蛇<蛇タイプの鋼の魔獣
から始まった事にちなんで>と決まった。

被験者はA。

蛇タイプの鋼の魔獣<獣の一種 不可思議な力を使う>の因子を
人間の中に組み込む事の成功を目標とする。

完成したならばそれは部分的な融合とは能力値の高さで比較する

だけ無駄といえるだけのものとなるだろう。

初期の頃からずっと身を捧げ続けてくれたこの被験者A。

そして実験により人類は大きな希望を見出すこととなる。

（省略）

われわれは急速な人類の科学の発達を……いや違う。

人類の進化を見ている。

現在進めているプロジェクト……鋼蛇。

知能ある魔獣、鋼蛇の完成の日は近い。

「そう、父と母は鋼蛇の研究に携わっていました」

日記を読み上げているジュナは一度顔を上げて二人を見た。

少しまた興奮してしまったので冷静さを取り戻しているようだ。

「研究はうまくいき、どうやらもう少しという所まで進んだようです」

シプリナは話に集中しているようだ……鋼蛇。

自分の知らない帝国の話。

でも最近よく聞く単語。

知っておかなければいけない気がする。

「でも……」

日記の続きにはこうある。

この実験は失敗かもしれない……。

彼の目を見たか。あれは人のする目ではない。

このままいけばわれわれは……もしかすると獣以上の化け物を生み出してしまうのかもしれない。

だめだ。

皆には悪いがやはり妻と娘を連れ町へ帰ろう。

コレまでの功績だってある。

それが許されなくともせめて妻と娘だけでも、と。

「この後は父と母はどういう経緯かはわかりませんが町に戻れたようです。そうしてしばらくこちらで研究したのち」

一呼吸おき、

「私を祖父に任せてまた帝国へと戻っていきましょう」

目を閉じ呼吸を整える。

「つまりジュナはこの研究、その、プロジェクト鋼蛇が何かに関係してるって言いたいよね？」

「……はい」

内容から言えばそうだろう。

なんらかの理由で研究施設へと戻り、事故か、あるいは……。

「父は鋼蛇を恐れていました」

シプリナはつぶやく。

「獣人には……鋼蛇には未知数な要素が高すぎると……」

「だから……だからきつとなにかが」

両親の研究対象は鋼蛇。

本当に何があったか、それはわからない。

でも何かあったのは間違いない。

まだ若い少女であるジュナにとって獣人、鋼蛇を拒否するのには十分な理由か、そうシプリナは思う。

実験による犠牲なら、それはたしかに鋼蛇に殺されたも同然かもしれない。

プロジェクトによって生み出された者との体面はつらすぎるのだろつ。

それにマヌグスのようなやつが派遣されて困るのはなにもジュナだけではない。

「……」

だんまりを決め込んだガガを見据えてジュナは、

「わかつているんです。いますぐ帝国に連絡をするべきだって……でも……でも」

少女の悲しみが部屋を満たす。

「……ガガ」

シプリナは沈黙する男の名を呼ぶ。

ガガはぼんやりしている。

今はジュナの顔の方向さえ向いていない。

一体この男は何を考えているのだろうか？

しかし……正直シプリナはここまで来たのだからってつきり協力するのかと思っていた。

ともかく。

ガガがなにもしないとなればシプリナには何かする術はない。

そうして三者の間に気まずい時間が数分だろうか流れはじめたとき。

「石が足りない」

「え？」

ジュナとシプリナは同時にガガの言葉に反応した。

ただ小さな声だったので聞き取れなかったが。

そこでシプリナが代表して聞き返そうとした瞬間、

「奴には用がある。もともと出向くつもりだった」

一転ジュナの顔は、パアッとひまわりのように明るくなった。

シプリナは、だったら早くそう言いなさいよという思いを胸にしつつガガを一にらみするが、ほっとした気持ちの強いらしくジュナを見ながら微笑んでいる。

そうして、獣たちの夜がまた、始まる。

プロローグ：【石を食らうもの】へ続く

ブローグ：少女と鋼蛇／其の三（後書き）

1 1 / 1 1 / 1 8
改行&文章微修正

プロローグ：【石を食らうもの】

なんとなく……そうかも知れないとは思ってたけど……。

胸のうちに不安の声と戦うシプリナの顔はわかりやすくも曇りきっている。

人のいない静かな夜。

いや、虫の声さえ聞こえない。

嫌な静けさ。

再び化け物ことバチューのいる湖に立つ。

ちなみにジュナはいない。

祖父をごまかしてもらおうというのもあるが、やはりガガが獣人であるということは知られてはまずい、とはシプリナの談。

素直なジュナがそれに従った形だ。

先の戦闘を見た分では、ガガの変体は見たところ普通のソレとあまり変わらないようだが、それでも見せないのに越したことはないだろう。

ジュナをこの場に呼べない理由は他にもある。

「罪を犯すのに抵抗がなくなったらおしまいね」

シプリナの空しい呟きが響く。

緑の石、それも精製された石なんてそう転がっているものではない。
い。

買うとしても莫大なお金が必要となるだろう。

緑の石はハンターなどを除けば船に使うなど街単位で手にするもの。
の。

見るからに懷事情が厳しい、この哀れな逃亡者二人組にどうこう
できる代物ではないのは語るまでもない。

「どうするつもりなのかとは思ってたけど」

つまらない冗談で「借りるだけだ」なんて軽口聞けるかもしれない
とも思ったが、やはりというかなんというか。

ガガの顔に冗談はない。

「ハア」

ため息は止まらない。

——緑の石は静かに、しかし不思議と心を惹く光をたたえている。

ちなみにバチューのことはあまり騒ぎにはなっていないかった。

前の戦いのことをジュナは周りに言わなかったようだ。

だから町の認識としてはバチューが一頭、勝手に暴れたという認識以上のものはないだろう。

おかげで興味本位で近づいてくるような人もなく、安心して火事場泥棒のような真似ができるわけだ。

本職が見たらうらやましがるとはだろうか。

それとも場所を選べと叱責するのだろうか。

「でもこれをどうやって使うつもりなの？」

とりあえず盗んだくちなみに盗んだのは船からである、ということとはひとまず忘れ、これから出会うであろう化け物に集中することにしたシプリナは尋ねる。

船に使う石だけあってでかい。

そう、赤ん坊を一回り大きくしたくらいのサイズはある。

ただ重さは意外と軽めだ。

だからといってシプリナだけで運べるような代物でもない。

その石をガガはちょうど机のような形をした台の上に乗せ眺めている。

ちょっとしたインテリアね。

二度と戻ることはないであろう自分の部屋だった場所を思い浮かべもの思いにふけていると。

パキン！

目の前で突然石は黒い鉄球によって砕かれてしまった。

案外軽い音だ。

「え？」

「……………え？？」

ガガは石を手取る。

自然な動きだ。

そこに罪悪感などは当然見当たらない。

「……………」

ガガはそしらぬ顔だ。

そしてそのままごくごく自然に口に含み、かじる。

パリパリ……パキ……。

しつこいようようだがガガの顔に冗談はない。

「し、信じられない」

思ったままの言葉がついてでる。

モグモグ……モグモグ……。

それでもガガは目の前の人間などお構いなしと、落ち着き払って食事をしている。

これほど大きな緑の石を一体どのように使うのか疑問に思っていたが……。

こんなにも直接的な方法。

石なのに。

モグモグ……モグモグ……。

しかもどういうことだろう。

食べている様子からは石が軟らかそうに見える。

もしや口に入れるとそうなるのか。

一瞬だけ想像をめぐらし、シプリナは自身もかけらを口に含む姿を頭に思い描いたが、すぐに「馬鹿なことを」と考え直した。

賢明だ。

モグモグ……モグモグ……。

夜。

獣の時間。

よい子ならずとも都市以外では人の自由を許されていない時間。
独特な食事を終えたガガは、特にリアクションをするでもなく、
昨日戦った場所から少しずれた場所に立っている。

以前戦った場所は簡単に整理してあるだけで破壊の後が残っている。

戦いには不向きと判断したのだろう。

姿は緑色を基調とした地味な装飾のある軽装である。

いつみても獣と戦う格好には見えない。

傷は完全に直っているらしく立ち姿に不安感はない。

便利な体だ。

目はなにやら怪しくなっている。

変体前の前兆みたいなものなのだろうか。

シプリナは少し離れたところから固唾を吞んで見守っている。

そもそもシプリナがこの場に来ても何ができるわけではない。

ただジュナの代わりに見届けるといふ思いを胸に見届けようというだけのことである。

ガガはその無謀な行動を止めたりはしない。

危険な状態におちいらせない自信があるのか。

ただ興味がないだけか。

「空気が張り詰めてきた。そろそろなの？」

直接戦わないとはいえシプリナも徐々に緊張感を増している。

当然だ。

大型の獣にわざわざ会いに行くバカはまずいない。

むしろ緊張適度ですむ事自体奇跡と言ってもいい。

麻痺しているのか。それとも前回の戦いぶりで楽観的になっているのか。

「……フフ」

ガガの口が歪み緑色のごくごく淡い光が体の周りを包んでいく。

視線の先の湖はまだ静かだがこの鼻の利く男が臨戦態勢を取るということは。

嫌な予感とほぼ同時、突然。

ザバアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
！！

大きな音とともに巨体が出現した。

今度は最初から大口もあらわにしている。

巨大だ。

思わず反則とつぶやいてしまうほどには。

シプリナは体を震わせながらも顔を硬直させ、

「ほかに登場の仕方なかったの！？」と胸のうちに叫ぶ。

愚痴を言うく心の中でだが、余裕はあるようだ。

「ガアアアアアアアアア」

怒りに満ち溢れた雄たけびは、ガガー人に向けて発せられている。

普通の人間ならこの声だけで気絶してしまうのではないかという怪音。

ガガは笑みを深めるばかり。

不敵というものではない。

ただ笑っているのだ。

その笑みが己を侮辱していると感じ取ったのか。

それはだれにもわからない。

ガコン！ ガコン！！

その太い足で高速の、まるで大砲のような一撃を出現して早々次々に放ってくるバチュー。

ガガのすぐ後ろの。

土上に木を張って出来た通路に大きな穴を作っていく。

さっそくきた！ 攻撃の数こそ違えど前回の戦いと同じだ。

ヒラリヒラリとガガは器用にかわし鉄球を投げつけていく。

もしこの獣がほかに隠しているものがないのならば。

以前と同じ様に案外すんなりと倒せるのではないだろうか。

そついった樂觀視を決して許さないのもまた獣なのだが。

出し惜しみを好んでいそうなバチューも、以前とは違い今度はタコ足を一本とは言わず二本三本と増やしていく。

そうして気づけば8本もの足がガガを狙っている。

絡まりそうなものだがさすがに自分の足で絡まるほど単細胞ではないらしく器用に突き、叩き続ける。

タコ足はまだまだあるが前面に出せる数はこれが限界なのだろうか。

ちなみにタコ足と言っているがタコと比べ足の数もその異様さも比べ物にならない。

湖に隠れている部分も含めたら軽く30本は越えそうだ。

ドン！ ドン！ ドン！ ドン！！

大きな音はただただ破壊の意思通りに地形の形を変えていく。

さすがのガガも次第に追い詰められていく。

そうしてかわしきれずに腕を弾かれ吹き飛ばされる。

顔は相変わらず歪んだ笑みを浮かべているが。

巨大な獣の一撃は直撃せずとも人間にとっては致命傷になる。

危険だ。

こうなると、始まって間もない戦いだ、シプリナは焦れる。

あの技を使わないのだろうか。と。

不思議な鉄球を使った技。

あの時は巨大な剣となった。

石をあれだけ食べたからにはやはり何かしたらあるのだろうと踏んでいた。

バチューも、意味合いこそ違うが直撃が当たらないことに焦れたのだろう。

雄たけびとともにその大口をこれでもかというほど開き、突っ込もうと体勢を整えている。

そうして、

「グオオオオオオオオオオ」

水を流し込む音、木を砕く音、石を砕く音、雄たけび。

食事というにはあまりに豪快。

ガガの立っていたはずの大地はバチューの口の中へと丸ごと納める。

バリバリ！ ガラガラ！ ガシャン！！ 大きな音。

口を閉じた後には、今後の工事にかかる費用を思うと胸が痛むような破壊の跡が残った。

あああ……シプリナの口から嘆き声が漏れる。

「なんてこと」

楽観していた気持ちちが綺麗に吹き飛んでしまう。

もう慣れるほどした絶望感が再び身を包み込む。

バチューは心なし満足そうに咀嚼そしゃくをしている。

瓦礫ごと食べるのだろうか。

化け物らしさがプラスされていく。

この世界の獣は獣らしくない行動をするものも少なくないという。

今日の前で起きた”食事”。

食べるものを選ばない行動なんかはまさにソレを示す証拠として文献に載ってもいい姿だ。

この場に獣を担当する学者の一人でもいればの話だが。

シプリナの呆然とした姿は多少の時間の経過程度では変わらない。

はずだったが、

「……なに、あれ」

ポツリとつぶやく。

恐怖が頭の中で彼女の絶望感を十分に刺激したところ、現実逃避なのかシプリナはバチューの大きな口、歯と歯の間から漏れ漂う濃い緑色をした霧のようなものが漏れ出し始める。

それに、まるで取り付かれたように見入るようになっていた。

しだいに霧は濃くなっていく。

バチューの息かなにかだろうかとも思ったがなにやら様子がおかしい。

バチューの咀嚼がふいにとまる。

霧はますます深まるばかり。

咀嚼がとまりシプリナにとっては長すぎる10秒間が流れたところ。

ガコン！と音を立てそうなほど豪快に歯が数本砕け散る。

「ガアアアアアアアアアア」

今日何度目かわからない鳴き声の中でも新鮮な、痛みを訴える叫びが響く。

中からは人型をした白を基調に淡い緑色の光を発するモノ、しかし顔の部分には顔と呼べるものが何もないモノが、濃い緑色をした

濃い霧<内側に行くほど淡い緑色>をまとって出てくる。

ピンと空気が張り詰める。

目、鼻、口と呼べるものはないが、前面は尖り、頭部も含み全体的にトカゲ？竜？のような、しかしそれにしては流線的な形状をしたモノがある。ほか部分には見覚えのある装備を身に付け。だが手にあるはずの鉄球はない。

まず間違いなくガガであろう。顔や露出した肌や手にはまるで原型はないが。ちなみに手の部分には人間の頭部ほど大きく凶暴な形をした拳がある。

「なにあれ」

再び誰に問うわけでもない疑問がポツリと口から出てくる。シプリナがやや苦笑気味に困惑し、ホツとしたのもつかの間。

怪人物と化したガガは流れるような動きでバチューの頭部に回り込み、腕を前に伸ばし、

グシャ！ という音を伴って偽者の頭部に大穴を開けた。

拳を前にただ突き出したという形。

続いてその拳は突然はじけ、そのバチューの偽頭部を吹き飛ばしていた。

痛みにようやく追いついたバチューの叫び声が聞こえる。

はじけた拳の部分には緑の石を思わせるくしかしひどく濁っている。半透明な緑色の腕がのぞく。

ガガ自身も変わり果て不思議な衣に包まれている状態らしい。

「う……うえええええええ」

途端シプリナに強烈な吐き気が襲った。

なぜだろう、体が重い。

異形だ。

獣の因子を持った人間。

姿はまるで無機質のようにも見える。

人間らしさなどまるでない。

しかしシプリナは気付くべきだった。

自身を覆う淡く濁りのない緑色のゆらめきに。

……状況は、そんなシプリナの状態など関係なく動きだしていく。

獣は止まらない。止まらない。バチューの猛攻はむしろこれから始まる。

プロローグ：【石を食らうもの】く其の二へ続く

プロローグ：【石を食らうもの】（後書き）

1 1 / 1 1 / 1 8
改行 & 文章微修正

プロローグ：【石を食らうもの】〜その二

自身の飾りを貫かれ獣ことバチューは、その怒りに身を任せたま
ま暴れ猛る。

すべてを破壊しつくさんばかりに。

「ガアアア、アアアアアアアアア」

雄たけびもますます大きくなる。

「ア”あ”あ”……！　ハアアアア！！」

獣の雄たけびに答えるように奇妙な怪人物と化したガガは息を吐
き出す。

ここでは人の言葉は意味をなさない。

先ほどまではまるで冷静そのものに見えたがそれは勘違いだった
とでもいうのか。

背を丸めたガガは獣人という名に恥じぬ乱暴さ、狂気さを次第に
思い出したかのように出し始めた。

「ゴハ！　ハッ！」

足という足を自分の体にぶつかろうがかまわず振り回すバチューの背に回り込み、大きく凶暴な右手で切りかかる。

ドシュッ！ ドシュッ！！

向かってくる蛸足を切り裂いていく。

「グググガアアアアア！」

必死の抵抗。

バチューはきつと今までに遭遇したことのない暴力に驚いているのかもしれない。

焦りという感情が果たしてあるのかはわからないが、正確さより手数だとも言つかのように暴れ狂っている。

「ふう……っ！ ふうっ！！」

吐き気からようやく解き放たれたシプリナは、今度こそ、今度こそ終わりなの？と祈りにも似た気持ちでそのあまりにも危険な戦いを見つめる。

板ははじけ、岩は削れ、水は噴水など目ではないほど高く高く舞い上がる。

戦争だ。

まるで大規模な戦争の一場面を見ているようだ。

猛攻というにふさわしい暴れっぷりの獣バチューとそれを上回る動きを見せるガガらしき者。

たった2つの物体が巻き起こす局地的な災害と言ってもいいだろう。

自分から巻き込まれて来たとはいえシプリナのような弱い人間にはつら過ぎる状況である。

ガガガガガアアン！！

ついに勢いあまった巨体が、体ごとガガにぶつけようと、体の半分以上を陸地に乗り上げる形で突進。

陸地はえぐれている。

こうなってしまうては勝敗は明らかだ。

勝敗は決する。

この獣が魔獣であるという事実を知らない人間にはそう映るはずだ。

そう、魔獣なのだ。

この獣は。

だからこそガガは一度目の戦いで優勢であつたにもかかわらず、油断せず石を大量に取り込んだのだ。

しかしその事実を知らないシプリナは次の瞬間のことをそれこそ死ぬまで覚えることになる。

バチューは。

そしてその周囲一体は。

一瞬の間をおいて。

消し炭となった。

唐突であつた。

叫び声もなく。

拳動もなく。

前兆と言つたものがなにもなかったのである。

目の前に巨大な球体が出来上がった。

真っ赤な球体。

きわめて熱く、しかし火の粉はたっていない。

触れさえしなければ問題ないのだろつ。

実際問題シプリナには何も影響が出ていない。

いや、あえて影響を語るなら、強いショックとさっきまで出ていた淡い光が消えてしまったことだろうか。

ともかく、シプリナのすぐ目の前には表面が黒くなった陸地が半円球にえぐれ広がるばかりだ。

「あっ！」

そういえばガガは？

そう思い、ヨロリと体をふらつかせながら一歩前に歩み出る。

暗がりだ。

あたりを照らしていたガガや自身の淡い光はもうない。

目を凝らしていくばくかポーッと眺め続ける。

「うそっ」

口からは現実を受け止められないと言った呟きがもれる。

それは……。

ガシャン！

黒こげな衣が表面から崩れ落ちる。

ガガだ。

なんと身に纏っていた衣はガガをあのだの球体から守っていたのだ。

中身は異質なものでなく以前のガガ。

それにもホツとしたのかは知らないがシプリナはお尻から地面に座り込んでしまう。

「何か……奴が何かをやるのはわかっていた。ただそのタイミングがわからなかった」

ガガは呟く。

「あれは……魔獣」

もう獣人の気配はそこにはない。

シプリナはガガの顔を見上げ、

「魔獣？」

「そつだ、魔獣」

たしか……ジュナに見せてもらった本にも書いてあった異質な能力を使う獣。

獣がまだまだ未知なのはわかるし、正直火を吹こうと不思議では

ない。

ただ事前にその事実を知ってるかどうかで気構えが違ってくる。

だからこそ心のそこからシプリナはこう言っただ。

「そういう事は今度から先に言って」

今あるすべての力を口から出し切るように弱弱しい声でガガへと言い放つのであった。

「ともかく、もう終わったのね」

「ああ……もうバチューの気配はしない」

バチューも哀れではある。

ガガの来るタイミングに合わせるように暴れだすことさえなければ、あるいはこの土地で嫌われながらももうしばらくは生き延びられたのかもしれない。

……タイミング。

まさかそんなことがあるのだろうか。

ガガを狙ってか。

それともなにか。

少々突飛な事をシプリナは考えてしまった。

「だめ、混乱してる」

しかしその考えも遠からず、と言ったところなのは彼らが知るはずもない。

少なくともこの戦闘をした人間よりもよほど疲れきった顔をした女性には。

「ああ……いったん、いったんね、部屋に戻る前に落ち着きましょう」

自分に言い聞かせるためなのは間違いないだろうが、そう言わないとガガが待ってくれないのは確実だ。

しかし現実には常にシプリナにとって厳しい方向へと進む。

「行くぞ」

やっぱりね。

シプリナはてっきりこのわからずやがこの場で待つ事に意味を見出せず言ったのかと思った。

だが、

「どうやら。派手にやりすぎたようだ」

シプリナはハツとなり周りを見渡す。

よくよく周りを見渡すと人がちらほらいる。

暗がりだから気づかなかった。

それはそうだ。

いつもの破壊音に加えて夜空が一時的に朝のように光ったのだから。

これだけのことが起こったのだ。

確実に帝国の知るところとなるだろう。

いや、今の光。

彼らをつけているものたちの目の端に移った可能性は十分にある。

「この街にはもう残れない」

彼らは表には出てこないだろう。

あくまで狙いはガガたちであるから。

帝国の命令外の事をする事はない。

なので極めてわかりづらい。

街の人間に紛れ込まれたらガガはともかくシプリナはまもなくつかまるだろう。

思い立ったら即逃げるのが正しい判断なのだ。

「わ、わかったわ」

急に名残惜しくなったのかすこし目を泳がせつつも、新たな脅威の前にはさすがのシプリナの決断も早かった。

「ジュナ……ありがとう」

せめて届かなくとも言っておきたい。

シプリナはその胸に強く思っのだった。

二人はまだまだ暗い夜道を、帝国とは逆方向へと向け力強く歩き出した。

プロローグ：その後 へ続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4102j/>

地の果てまで逃げる男ガガ

2011年11月19日18時04分発行